今年の秋には、オリンピック東京大会が開催され、幼児教育においても、諸外国のそれと、比べられる機会もあることと思います。社会的な幼児の躾という面では、残念ながら、未だ及ばないところがあるのではないでしょうか。

幼稚園においては対人関係、対社会関係など、できる限り社会性を養うように努力し、他人に迷惑をかけないよう、公共の場所を汚したり、損ったりしないようにという躾に力を入れておりますが、日本の社会全体に浸み込んだ社会的躾は、完全とは言えません。善意の社会、礼儀のある社会を作っていかなければならない幼児の躾を、私たちは、もっと研究し繰り返し努力していかなければならないと思います。それには、父兄の理解・努力が、大きな力を持っているので幼稚園と家庭が一体となって、是非、実現させたと思います。

（洗足学園幼稚園）

幼児の姿から見通して

関　治　子

新学年を迎える時、二つの立場がある。

第一は、新入園児を迎える時で、私たち教師は、気分も新たに、期待と責任を存分に感じることである。新入園児を迎える準備を進めていく間に、個々の幼児の姿を感じ、教師としての精神的な準備体制をつくり始めていく。

第二は、ひきつづき継続して保育する場合の新学年を迎える時である。これは、新たな気分というよりは、過ぎた年の教師個人としての反省、そのクラスとしての特徴というか独自の傾向をよく捉えてみる、ということが先ず頭に浮かんでくる。

第一の場合を考えてみると、新入園児を迎える心構えとして述べていくと、本題からそれてしまうことになろうが、個々の家庭生活の経験だけをもつ幼児が、はじめて幼稚園という集団社会の生活を経験する時に、その第一歩が、よりあやまりのないものであるように願うところが大きい。あやまりのないという意味は勿論、消極的な気持のあらわれではない。身体的にも心理的にも如何に幼児にとって望ましい経験を体験していかせるかということである。

それを、具体的に考えると「一年間に、このクラスでは、何と何の活動を経験させる」という形で、冒頭に教育内容の計画を綿密に立てることは、無理が生ずるのではないかと私には考えられる。では、どのように実際にやってみたかというと、幼稚園として教育方

針と、幼児の人間形成ということは大きな目標として頭に入れておいた上で、次のような順序を追っていった。例をあげると「新入の幼児が、先ず幼稚園であそぼう!! という楽しい気持でこられるように。お友だちと一しょに、こういうあそびをしたい!!」――こういうことが『幼稚園に親しみをもつ』『友だちとあそべるようになる』そのためには、『簡単な約束やきまりなどが少しわかる』『身近な日常の生活習慣を身につける』というような目標となるわけである。幼稚園にある玩具であそび、庭の遊具であそぶというように、ここに実際の幼児の姿がある。その為の環境の整備と教師の誘いかけや、幼児との会話、態度など教師の留意すべきことがら、これらが同時或いは相前後して実際に動いている。そして、それが目標に達した姿になる。つまり、目標と実際は非常に密接である。

このように、幼稚園での幼児の実際の生活は、多面的に動いているので、その生活からかけ離れない計画をもちたいわけである。

その学年の大よその計画は、経験によってわり出したものであったり、経験の浅い間はその幼稚園としての経験や、先輩の方の教えを頂いて考える その計画というのは、これはそれぞれの立場の考え方によって、意味が違うかと思うのであるが、私は幼児期の発達の特質から考えて、指導の目標がいろいろある、これを実際の現在の幼児を眺めながら、具体的な活動をとり入れていくというように考えた。これを実際に全部書いていくことは、たいへんこまかいことでもあり幼児のあるがままの姿を羅列することにもなるし、また、何かの機会に、当幼稚園の目標とか幼児の活動などお目にふれていると思うので省略させていただく。具体的な例としては、現在に至るまでの一年間のクラス四才児をふり返ってみた時の足跡によって計画のあり方を知っていただけるかと思う。

四月冒頭に感じたことは、自己主張の多いつまり、自己性の強い幼児が多いということだった。このように、実際にクラスの幼児の特性にふれてみると、どのように指導の方法をすすめていくか、考え方も変ってくる。人間関係と社会生活を円滑に進めていく、特にこの点を強調して指導していきたいと思い、集団のあそび、鬼あそび、競走あそび、わらべうたあそび、製作などの場面でも個々のものを持ち寄って一しょに楽しむ（協同製作までいかない、例えば、皆のえを細長くつなげて、一しょに運動会の行進の場面にしたり、皆のつくった人物やものを同じ場所に集めてとりつけ、たまいれをしている場面にまとめるなど）こういう傾向にもっていった。

自己主張が強いという点は、長所として発表力を養う方向にと思いこの手段として劇あそびをという計画を二学期にもったのだが、僅かな活動だけで、これは時期的なことで、計画をとりやめてしまった。発表力ということは、言語面に直接法でいかずに、多面的に扱った方が適当と思い、これは後に述べる別の計画にたて直した。このクラスは、音楽リズムを好んでよくする傾向がみられた。（現在

の一般の母親の風潮であろうか、絵画製作の表現活動より、音楽面のことに家庭でも関心が強いようで、音感教育を受けさせる傾向が多い）そこで、音楽の面で自己発表という機会を多くもった　うたも、身体の動きも共に、表現を楽しみ吸収が積極的と考えられたからである。例えば「まねっこ」と称して、二人交互に、表現をして、互いに動作をまねる　これは、自分も表現を考え工夫し、友だちの動作も感じとりそれを表現し、これをまた、多ぜいの友だちの前でも発表する。更にこれを一対クラス全員という形でも行なった　この音楽の面から、入って計画したものに電話こっこがある　これはうたの歌詞を応用して幼児にその部分を自分自分に表現させたり、音楽から離れて電話あそびという形で、あそびの中で言語的発表ということを考えて、計画をすすめている。ある幼児は、父親になりきって応待したり、警察の人になりきったりして、現実的であったり想像的なことを言える幼児もいて、幼児たちはよろこんでいるようすが見られる

これは、経過の記述であるが、私としての「計画」についての考え方をのべたことになってしまった　実際の手段や教材は、幼児からヒントを得たものもあり、教師の工夫による計画のこともあり、計画が不適当で、その副産物的なものから、本筋に入っていくものもある。要は、目標は見失わず、計画としても頭に入れておき、その他具体的なことは、早くから先の見通せるものと、刻々と決まっていったり、動かし得るものであるという考えで行なっている。勿論、最上の状態と方法というわけではない、試行錯誤をくり返している状態といえよう

「抱負」ということについてはいたたいた題材からすると、私のは当を得ていないかと思うが、第二の立場として新学年にあたっては、今までにできなかったこと、できにくかったこと、欠けていた点を、折りこまねはならない。手段としては、絵画製作面での表現活動を盛んにし、理想であるところの、子どもらしいのびのびした中に、安定感と充実感のある幼児の姿、クラスのあり方に近づけたい、これを抱負ということにしたいと思う。

（お茶の水女子大学付属幼稚園）

子どもに発展の場を

土　橋　克　子

年少組としてこの一年を経てきた子どもたちの名簿を眺めながら新学期への期待は大きい。今ここに語ろうとすることは抱負のみに